

## お金の基礎知識

人間は放っておいても徐々に賢くなる生物です。なぜなら、どうせ同じ結果が得られるならなるべく楽をしようと考え、仕事を効率化するからです。

そのため、時代が下るにつれて生産性が向上し、物の生産量が増えていきます。

物の生産が増えると取引量が増大し、決済に必要な貨幣に対する需要も増加します。趨勢的に増加する生産量と、それに伴って高まる貨幣そのものに対するニーズが正のフィードバックループを起こしている。

要するに、お金の量が増加すれば、相対的に物の量が不足し、価値が上昇するわけです。

価格が上昇すれば、それは生産者に生産量を増やすためのインセンティブを与えます。

そして、生産量が増加すれば、それに伴って取引量も増加します。取引が活発になればなるほど、貨幣需要も増加します。

もし、ここで追加的に貨幣量が増加しなければ、経済は成長を止めてしまいます。

逆に、追加的な貨幣の増加が継続的に続く場合、経済はその後も順調に成長することになります。

ただし、注意しなければならないのは、貨幣量を 100 倍に増やせば、たちどころに生産量が 100 倍に増えるわけではないという点です。

貨幣量の増加が引き出すのはあくまでも埋もれていた潜在的な経済成長の力であって、それはじわじわとした変化でしかありません。

現実には、実体経済の成長に合わせて少し背伸びをする位の貨幣量の増大を維持することは、とても良い効果があります。

現代において、多くの中央銀行が物価目標を設定していますが、その目標値が概ねインフレ率 2~4%程度である理由はまさにこれです。

マイルドなインフレこそが、成長に必要なマクロ経済環境なのです。

これは、絶対に逆らえない「経済の掟」の 1 つです。

では、この掟をより具体的な貨幣制度として社会インフラ化するためにはどうすればよいでしょうか。

そのシステムを成り立たせるためには、そもそも貨幣経済の礎となる貨幣が少なくとも以下の条件を満たす必要があります。

- 1、持ち運びが容易であること
- 2、誰でもが本物だと判別できること
- 3、物の価値を数値で表せること

貨幣による取引は物々交換に比べて圧倒的に楽です。

その上、取引の利便性、効率性を大いに高めます。そして、人はいちど便利なやり方を覚えるとなかなか元には戻れません。

例えば、あなたは、魚をとる漁師だとして、釣り針を買いに行ったとする。  
釣り針職人が「野菜となら釣り針を交換してもいい」と思っている場合、あなたは手持ちの魚と釣り針を交換することができません。  
魚と野菜を交換してくれる農家を探すために余計な手間がかかります。  
ところが、貨幣を媒介として取引すれば、魚を売ったお金で、釣り針を買えばそれで済みます。  
釣り針職人は、あなたから得たお金で農家に行って野菜を買えば良いからです。  
なんと効率的！、貨幣の使用とは、経済の革命だったのです。

「お金の不足」とは何か？

「経済の掟」は歴史上どの時代においても通用する普遍的な法則です。その中の1つ「ワルラスの法則」は「世の中は物とお金のバランスで成り立っている」という極めて単純な恒等式で表すことができます

経済学者で明治大学準教授の飯田裕之氏の説明によれば、ワルラスの法則とは「ある市場が超過需要状態であるならば、必ずどこかの市場で超過供給状態になっている」ということです

世の中には、モノとお金しか存在しないとすれば、物不足はお金の過剰であり、ものが過剰であるなら、お金不足ということになります

これを読み変えることで、インフレとデフレについて、次のように説明することができます。

(インフレ)

ものは超過需要状態にあるならば、お金は超過供給状態にある

=お金がたくさんあるともものが売れる

(デフレ)

お金が超過需要状態にあるならば、ものは超過供給状態にある

=お金が不足するとものが売れない

モノは不足すれば物価が上がり(インフレ)、お金が不足すると物価下がります(デフレ)。

物不足でインフレと言うのは理解しやすいですが、お金不足というのが具体的にイメージしにくいかもしれません

人間は毎日賢くなるため、ものは放っておいても毎年より良いがものがよりたくさん生産されています。

人間は楽をしたがる動物なので、どうせ同じ結果が得られるのなら、なるべく少ない動力を使ってそれを達成しようとする方法を工夫します。いわゆる「ショートカット」の発明です。

そして、いちどショートカットが発見されると、それが多くの人に拡散され、みんなが真

似をします。

その結果、前の年と同じ労働力を導入しても、翌年にはより良いものがよりたくさんできてしまうのです。

これを先ほどのワルラスの法則に当てはめてみましょう

左のモノは、毎年自然に増えていくのに対して、右側のお金は、人工的に増やさない限り増えません

より具体的に言えば、お金は中央銀行は人工的に発行しない限り増加しません。

何らかの理由で中央銀行はお金を供給するスピードがモノの増えるスピードを下回ると、将来的にお金が不足する事は確実となります。

その時、人々は将来的にお金の価値が上がることを予想して、お金を溜め込み、モノを買うのをやめてしまうのです

つまり、デフレと言うのは需要そのものが喪失してしまったのではなく、人々の需要がお金に向いてしまっている状態のことなのです。

需要がお金に向くと言う事は、人々はお金を貯めることに熱心で、モノを買うことには消極的と言うこととなります。ものは売れずに余ります。

そうすると値引きしてでも在庫を処分しようとする人がたくさんできて、結果的にモノの値段が下がっていきます。このことは、裏を返せばお金の価値が上がっていることを意味します

このように、お金の量がこの先増えていくか、減っていくかによって、今日の前でもものが売れるか、売れないかが概ね決まるわけです。

景気の循環は「貨幣量の変化」で説明できる

通常、モノがたくさん売れる時は好景気、売れない時は不景気となります

景気が良ければ人々はお金儲けに忙しく、過激な思想は見向きもしません。

ところが景気が悪くなると多くの人々が経済的に困窮し、場合によってはヤケを起こします。

この時、好景気の時は見向きもしなかった過激思想に人気が集まります。人々は、苦境を脱するための大胆な解決策に救済を求めるからです

しかし、その大胆な解決策が、人種差別、テロ、戦争だったりする場合は往々にしてあります。

歴史上の事件とは、景気の循環によって人々の気持ちが変わることによって起こっているのではないのでしょうか。

そして景気の循環は「貨幣量の変化」で概ね説明できます。という事は実は人類の歴史を作っているのは「貨幣量の変化」なのではないか。

「経済で読み解くシリーズ」はまさにそういう仮説を証明するために書いてきました。

実際に調べてみると、面白い位に「貨幣量の変化」が人々の心理に大きな影響与えていることがわかりました。

ただし、この仮説が機能するために重要なもう一つの要素があります。それは、人々の景況感に対する「認知バイアス」です。

認知バイアスとは、実際に起こっている事件と、その事件の捉え方の問題にあるズレのことを指します。

バブルがとっくに崩壊しているのに「ジュリアナ東京」で夜ごと盛り上がっていたサラリーマンとか、孫の就職環境はとっくに良くなっているのに「アベノミクス」の成果を実感できない団塊世代のおじいちゃんとか。

こういう人々が持っている「現実とは離れた景気認識」こそが、認知バイアスです。別の言い方をすれば「少し前の時代状況に引きずられた誤解、誤認」だと言って差し支えありません。

安倍政権が誕生して早7年、アベノミクスは着実な成果をあげています。失業率は3%を切り、就職者数は2,00万人以上増えました。

民主党政権下の失業率は5%で、就業者数は30万人減でしたから、素晴らしいV字回復だと言えるでしょう。

また、国の財政状態も大幅に改善しました。

2018年のIMF財政モニターによれば日本の債務はゼロです。マスコミは債務総額の1000兆円ばかりを問題にしていますが、これは貸借対照表の意味がわからないど素人が、増税したい官僚の言い訳をコピペしているだけなので、無視してください。

IMFの言う通り政府が持つ資産を相殺すれば、純債務はゼロです(政府とは、政府、日銀の統合政府を指します)。実は、日本の財政再建も既に終わってしまったのです。

景気回復を実感できない人が多いのはなぜか？

多く的人是不景気が終わってもそのトラウマから立ち直ることができません。その時のインパクトのある悪い記憶にとらわれているからです。そして、すでに目の前では景気回復が起こっているし、正しい経済政策はとっくに実施されているにもかかわらず、「未だ不況が続いている」と誤解し続けるのです。

そして、その逆もまた然り。平成初期のバブル崩壊後、人々は10年近く景気の悪化を実感しませんでした。

現在、野党やマスコミを中心とした全くエビデンスに基づかないアベノミクス批判は、このようなメカニズムによるものです。

まさに「認知バイアス」と言う言葉がぴったりする位なのではないでしょうか。